

善光寺如来と金銅仏

善光寺白蓮坊住職

若麻績敏隆 わかおみ としたか

昨年の春、信州善光寺と東京両国の回向院は、回向院境内において東日本大震災復興支縁（復興支縁）の「善光寺出開帳両国回向院」を開催した。出開帳というのは、もともと江戸時代に各地の寺院が伽藍を造営したり修理したりする資金を集める目的で、その寺の仏像を奉じて江戸や京、大坂などに出張して開帳を行ったものである。江戸における出開帳では、特に成田山新勝寺、嵯峨清涼寺、身延山久遠寺とともに信州善光寺の出開帳は出開帳の四天王と

呼ばれ大変な人気だったという。今回の出開帳は、出開帳仏として普段は善光寺大勧進の内仏殿に安置されている善光寺如来像を回向院念仏堂に遷座し、東日本大震災の復興支縁を掲げて被災地への祈りを捧げ、集まった収益をもつて具体的な支援を行うことをその目的とした。

この出開帳では、被災地に向けての心の支援として、銅造の善光寺如来像を新たに七体造立し、被災地の寺院に届ける「結縁交名」という企画が回向院

により発案され実行に移された。

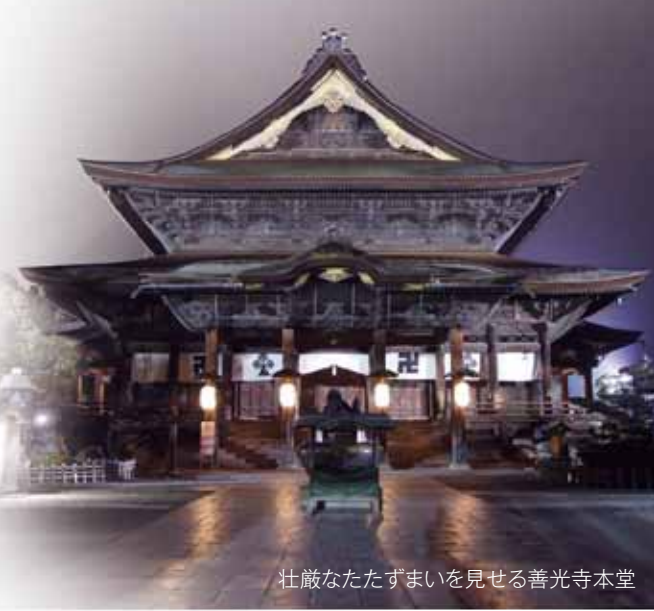
結縁交名とは、仏像を造立するにあたって結縁者を募り、その名簿を仏像の体内に収めることをいうが、今回は震災犠牲者を追悼するために仏像を造立して被災地に届ける趣旨に賛同する結縁者を募って、その名簿を仏像台座に封入して、被災地寺院に届けることとした。期間中の結縁者は二万二千名にのぼり、仏像一休毎にそれぞれ三千名以上の名前を記した結縁交名帳が納められて会期後に被災地の寺院へと届けられた。

結縁交名のための七体の善光寺如来像は、仏師の村上清氏によって制作されたもので、もともと回向院に伝来する江戸初期の善光寺如来像の姿をやや縮小して制作されたものであった。回向院念仏堂の二階には被災地への祈りの場が設けられ、震災犠牲者を追悼するために陸前高田市の高田松原の松で造立したおやこ地藏尊や、津波で全壊した陸前高田市金剛寺本尊の如意輪観音像、そして同じく津波で全壊した要害観音堂に安置されていた正観音像とともに、七体の黄金に輝く真新しい善光寺如来像が安置された。

一般に善光寺如来、あるいは善光寺仏といえは、秘仏となつている善光寺本尊を意味する。善光寺本尊は、縁起によれば欽明天皇の十三年（五五二）、仏教伝来とともに百濟より我が国に渡つた日本最古の仏像である。人々を分け隔てなく極楽へと導いてくださる平等大慈悲の仏として信仰をあつめたこの仏は早くから絶対の秘仏となり、その姿を直接拝することは叶わなくなったが、この仏の分身仏（模刻像）は全国に広く分布しており、これらに共通した特徴である二光三尊形式の姿は一般に良く知られるようになった。舟



法隆寺献納四十八体仏の一光三尊像（写真提供：東京国立博物館）



壮麗なたたずまいを見せる善光寺本堂



被災地への祈りを込め、多くの人が参列した「善光寺出開帳両国回向院」

形の光背の前に、阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩が並び立つこの形式の仏たちは、善光寺本尊の分身として、同様に善光寺如来と呼ばれて各地で厚く信仰されてきた。こうした分身仏は、現在、善光寺が把握しているだけでも全国に四百体以上が存在する。これらの仏は、善光寺信仰が全国へと流布する鎌倉時代以降に造立され、各地に安置されたものである。交通機関の発達していない時代、善光寺への参詣は決して容易なことではなかったが、全国各地に分身仏を祀る新善光寺が建立されて、人々の信仰的渴望に応えたのであった。

縁起によれば、秘仏の善光寺本尊は閻浮檀金という金を用いた黄金の仏だという。この本尊の姿に擬するため、分身仏の多くは金銅仏で造られた。銅造の仏像に金メッキを施す技法で造られた金銅仏は、すでに紀元二世紀頃のガンダーラ仏にも作例があることが知られている。その後、仏教が東アジア全体に広がるのと中国や朝鮮半島でも数多くの金銅仏が造られた。朝鮮半島から我が国へと仏教が伝来した当時、大陸

からは多くの小さな金銅仏がもたらされたと考えられているが、秘仏となっている善光寺本尊もまたそうした金銅仏の一体ではなかったかという指摘もなされている。東京国立博物館に収められている法隆寺献納四十八体仏という小金銅仏群の中には、善光寺如来に酷似した二光三尊像がある。四十八体仏のほとんどが飛鳥時代以降に日本で造られたものと推定されているが、この三尊仏は三国時代の朝鮮半島で造立されたとする説があり、この仏に善光寺本尊の面影を見る人もいる。

金銅仏といえば、法隆寺金堂の釈迦三尊像や薬師寺金堂の薬師三尊像、そして東大寺大仏などの堂々たる記念碑的仏像の存在を忘れてはならない。しかしながら一方で、わずかに数センチから数十センチの小金銅仏は、その機動性の高さから、古代における東アジアや日本での仏教の伝播と普及に大きな役割を果たした。そして鎌倉時代になると再び善光寺如来信仰の普及のために多くの小金銅仏が誕生したのである。分身仏を多数造立するにあたっては、鑄造による複製能力も役だった。

栃木県真岡市の専修寺如来堂は、鎌倉時代に親鸞聖人によって善光寺からもたらされた二光三尊仏(善光寺如来)をまつること知られる。この仏が本年春から二年間、三重県津市の本山専修寺などに遷座され十七年ぶりの御開扉が行われる。この二光三尊仏の御開扉期間のちょうど中間にあたる来春には、信州善光寺でも七年に一度の盛儀である前立本尊御開帳が行われ、それに呼応して甲府、飯田、祖父江、関、岐阜などの各地の善光寺でも

同時に御開帳が行われて善光寺仏の御開帳ラッシュとなる予定である。中でも、信州善光寺、甲府善光寺、そして専修寺の仏は鎌倉時代に造立され、その後、数百年にわたり人々の信仰を受け続けてきた金銅仏である。

回向院での出開帳で人々の真摯な願いをその身に込めて生まれたばかりの七体の新しい善光寺如来像もまた、これらの仏と同じように、今後末永く、それぞれの土地で、多くの人々の祈りをしっかりと受け止める仏であり続けることを切に願うものである。



わかおみ としたか
善光寺白蓮坊住職 若麻績 敏隆

昭和33年 長野市に生まれる
昭和57年 東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業
昭和59年 同大学院美術研究科修士課程修了
昭和62年 大正大学大学院仏教学コース修士課程修了
現在 善光寺寺務総長(～平成26年3月)、善光寺白蓮坊住職
パステル画家として日本橋三越本店、大丸東京店などで個展多数